

赤ひげ診療譚

おくめ殺し

山本周五郎

青空文庫

十二月にはいつてももない或る日の午後八時過ぎ、——新出去定は保本登と話しながら、伝通院のゆるい坂道を、養生所のほうへと歩いていった。竹造が去定の先に立って、提ちようち灯んで足もとを照らしながらゆき、薬籠やくろうは登が負っていた。一人の使用人に二つの仕事を同時にさせてはならない、と去定はつねに云っている。医員たちはべつであるが、下男下女、庭番などにはこの内規が固く守られていて、これまでも登が薬籠を背負うことは珍らしくなかつたし、去定その人も例外ではなかつた。

——疲れているんだな。

去定の話を聞きながら、登は心の中でそつと首を振った。去定は疲れてくると怒りつづくなる。その日はことに病人が多く、十五カ所も診察に廻つたあとで、帰りがいつもより一刻ときちかくもおくれ、疲労と空腹のためにいつそう苛立いらだつていたらしい。「かよい療治の停止」について、役人たちの無道さを激しく非難した。

養生所の経費削減と、かよい療治の停止令が出たのは夏のことであつた。そのとき去定

はずいぶん抗議をしたが、結局どうにもならず、去定がその費用を負担するという条件で、かよい療治を黙認することになった。そのため去定は、従来よりも多く、大名諸侯や富豪、大商人などの依頼に応じ、その収入で削減された経費や、かよって来る病人の投薬をまかなくて来たのであるが、数日まえまた養生所付きの与力から呼ばれて、「かよい療治は一切ならぬ」ということ、同時に、入所している病人でも、身内に多少でも稼ぐ者がある場合には「食費を取る」ように、ということ云われたのであった。

「富者の万燈より貧者の一燈ということがある」と歩きながら去定が続けた、「これは貧者の信心こそ仏の意志にかなうという意味らしいが、じつはまったくのたばかりだ」

万燈を献ずる富者には限りがあるし、いつも万燈を献ずるものではない。だが、一燈しか献ずることのできない貧者は多数であつて、しかも、一燈くらの寄進ならいつでも応ずるだろう。「仏への供養」は来世へのつながりであり、安樂往生のみちだという。この世で貧苦にいたためつけられ、一生うだつのあがらない人たちは、せめて安樂往生、来世での成じよぶつ仏ぶつということに頼りたくなる。その弱身をつかんで、一燈をたばかり取る賢さは、政治にそのまま通じているようだ。

「幕府の経済が年貢運上によつて成り立つことはいうまでもない」と去定は云つていた、

「しかし、それを支えているものはつねに、もつとも多数の小商人や小百姓や職人たちだ、その例をここで並べる必要はないだろうし、その是非については一概に云えない面もある、それにしても、かれらが日雇い人足の僅かな賃錢にまで運上を課することや、施療を受けているような病人から食費を取る、などという無道さには、がまんがならぬ」

去定はどしんどしんと、ちから足を踏んで歩いた。

「むろん、おれがここでどう頑張ったところで、役人どもを動かすことはできない」と去定は云った、「たとえ二三の役人を動かすことができたとしても、幕府の政治まで動かすことはできない、だからこんなことを喚きたてるのはばかげたぐちだ、源氏であれ平家であれ、人間がいったん権力をにぎれば、必ずその権力を護るための法が布かれ、政治がおこなわれる、いついかなる時代でもだ、——保本はおれの、こういうぐちを幾たびか聞いている、さぞうんざりしていることだろう、また始まったかと思うだろう」去定は声を高めながら、まるで登がなにか云おうとしたかのように、暴^{あつ}あらしく遮^{さへぎ}った、「いや、なにも云うな、おまえがどう思おうと構わぬ、誰がなんと思おうと構わない、たとえこれがばかげたぐちであろうとも、おれは生きている限り喚きたててやる、お、——」

お、と云いかけて去定は急に足を停めた。そこは伝通院の土塀^{どべい}が終ろうとするところだ

つたが、竹造がへんな声をあげ、土塀に沿っている溝のほうへ提灯をさし向けた。

「なんだ」と去定が訊いた。

竹造は「人が倒れています」と云い、溝の中を覗きこんだ。

「おい」と竹造は呼びかけた、「どうした、おい、どうかしたのか」そして、もつと覗きこんであつと叫んだ、「ああ血だ、ひどいけがをしているようですよ先生」

「触るな」と去定が云った。

近よつてみると、溝の中に若者が一人倒れていた。石でたたんだその溝は、幅も深さも三尺たらずで、水はないが、横に倒れこんだ男の軀は身動きもできないようであつた。去定は提灯の光を寄せて男のようすを眺めた。年は二十七八にみえる、めくら縞の長半纏ながぼんてんにひらぐけをしめているが、着崩れで胸も足も裸同様であり、元結が切れてさんばら髪になつた頭から、顔の半面、胸まで血に染まつていた。男は荒い息をし、低く呻いていたが、去定が声をかけると、軀ぜんたいがびくつと動き、いきなり仰向けになると、右手を胸の上で構えた。その手は九寸五分を握つてい、それが提灯の火で氷の断面のように光つた。

「おちつけ」と去定が云つた、「おれは小石川養生所の医者だ、おまえはひどいけがをしているがどうしたんだ、喧嘩けんかか」

男は顔をあげた、「誰かそこらに、そこらに人はいませんか」

「誰もいないようだ」

「やりそくなつた、ちくしょう」と男は呻いた、「もうちつとのところだったのに」

「喧嘩だな」

「野郎を一人殺すつもりだったんですが」と男は答えた、「向うに用心棒がいて、こっちのほうがこのざまです、濟みませんが立たしてくれませんか」

去定が「竹造」と云い、提灯を受取った。竹造は溝の中へはいり、男の両腕へ手を入れて、そつと抱き起こした。男は辛うじて立ちあがったが、右足ががくんとなり、するどく呻きながら、崩れるように坐りこんだ。去定は提灯を登に渡し、男の側へ寄つて、右の足をしばらせた。

「脛すねの骨だな」と去定が云つた、「折れてはいないようだ、たぶん罅ひびでも入つたのだろう、竹造、おぶつてやれ」

「どうするんですか」と男が不安そうに訊いた。

「どうするつて」と去定が怒つたように云つた、「おれは医者だと云つたらう」

「しかし、あつしは」

「竹造」と去定が云った、「おぶつてやれ」

竹造は男を背負い、去定は大股に歩きだした。

一一

男の名は角三かくぞうといい、年は二十五。住居は小石川音羽おとわの五丁目、藪下やぶしたと呼ばれるところにあつた。養生所へ伴れていつて診ると、傷は頭に二カ所、肩から背中、腰、足などに五六カ所あつて、頭だけは刃物の傷だが、ほかはみな棒かなにかで撲なぐられたらしく、脛の骨には罅が入っていた。

藪下の長屋は去定も知っていた。いまでもときどき寄っているが、角三というその男のことは知らなかった。

「あつしは十二の年からよそへ出ていたんです」と角三は云った、「おやじは加吉といつて、二年まえに死にました」

「加吉」と去定は眼をほそめた、「——あそこは八軒長屋が三棟並んでいた、加吉といつと、端の長屋で豊職人をしていたと思うが」

「そうです、足の痛風で立ち居が不自由なくせに、おつそろしく強情なおやじでした」角三は寝返ろうとして顔をしかめ、痛みをこらえるために歯をくいしばった、「先生は、――」と彼は痛みをそらすように、わざと平気な声で訊いた、「先生は多助っていうとしよ

りを知ってますか」

「夜鷹よたかそばをやっていた老人だな」

「そうです、済みませんがあそこへ使いをやってもらいたいんですが」と角三は云った、「おたねっていう娘に来てもらいたいんです、話さなくっちゃならないことがあるから、すぐ来てくれって云ってもらいたいんですが」

「明日になったら呼んでやろう、今夜はこのまま眠るがいい」

「今夜はだめですか」

「おまえは誰かを殺そうとしたんだろう」と去定が云った、「町木戸で咎とがめられたとき、もし気づかれたらどうする、朝になったら使いをやるから、今夜はおとなしく寝るがいい、さもないと傷に障るぞ」

角三は眼をつむって云った、「わかりました、どうか朝になったらお願いします」

去定は登を見て立ちあがった。登は付いていてやろうかと思つたが、去定の眼つきで、

その必要がないことを悟り、立ちあがってその病室を出た。去定は自分の部屋へゆこうとしていたが、登の出て来るのを見ると、「済まないが握り飯を持って来るように云つてくれ」と云った。その言葉で、急に登も空腹だったことに気づき、いそいで廊下口から賄所のほうへ出ていった。

じきんどう
食堂は八時に閉まるので、それ以後は賄所へいくよりしかたがなかったのである。登がはいっていくと、賄所も灯が一つ残っているだけだったが、うす暗くてがらんと広い土間に、男が一人、箱のような物を作つてい、その脇にお雪が立って、それを眺めていた。登はお雪に二人前の握り飯を頼みながら、男が猪いの之であることに気づいた。

「猪之じゃないか」と登が呼びかけた、「ばかに精をだすな、なにをやってるんだ」

「へえ、なにちよつとその」猪之はあいまいに口を濁した、「先生がたもこんなじぶんまでたいへんですね、外は寒いでしょう」

「話をそらすな、なにを作ってるんだ」

「その、おまるの腰掛なんです」そう云いながら猪之は赤くなつた。

「おまるの腰掛だつて」

「御存じでしょう、おゆみさんという頭のおかしな娘さん」と猪之が云った、「あの人が

すつかり弱つちまつて、おまるを使うにも軀がふらふらするっていうんです、それで腰掛こしらを拵こしらえたら幾らからくだらううっていうもんで、ためしに作ってみているんです」

「そうか」と登が云つた、「お杉に頼まれたんだな」

「あつしの役ですからね」と猪之はひどくいきごんだ高い声で云つた、「こういう仕事をする約束でお世話になつてゐるんですから、誰に頼まれたからするってわけのもんじゃねえ、へんなこと云わねえでおくんささい」

「気に障つたのか」と登は笑つた、「それは悪かつた、勘弁してくれ」

「とんでもねえ、そんな」猪之はまた赤くなり、まごついたように頭を掻かいた、「先生にあやまられたりしちやあぼくめんがねえ、へえ、大きな口をたたいて済みません、あつしこそ勘弁しておくんささい」

「お互いに礼儀は正しいわけだ」と云つて、登はまた笑つた、「お杉によろしく云つてくれ」

猪之はやけに金かなづち槌づちの音をさせた。登はお雪から手提げの籠を受取り、あとから茶を持つていく、というのを聞きながら賄所を出た。

夜の明けるのを待つて藪下へ使いがゆき、おたねという娘を伴つれて来た。おたねは十九

という年よりふけてみえるし、気性もしつかりしているらしく、頭を晒木綿で巻かれた角三を見ても、とり乱したようすは少しもなく、去定の話すことをおちついて聞いていた。

「十日もすれば起きられるだろう」去定は傷のもようを説明してから云った、「足のほうはようすをみないとわからない、たぶん一と月もすれば治るだろうと思うが、それまでは立ち歩きをしないほうがいい」

「うちへ伴れて帰ってはいけないでしょうか」

「五六日はこのままのほうがいいだろう」と去定が云った、「手当をするにも都合がいいし、また、なにかまちがいがあつたようだから、いま伴れ帰っては悪いのじゃあないか」

「はい、そのことなんです」

「おたね」と角三が云った、「なにかあつたのか、高田屋からなにか云つて来たのか」

「ええ」とおたねが答えた、「ゆうべおそく、伊蔵が男たちを三人伴れて来て、水戸さまのところまで若旦那を殺そうとした者がいる、この長屋の人間に違いないから出せつて」

「やつぱりそうか」

「一軒一軒みて廻るので、あたし」とおたねはちよつと口ごもり、それから角三の気をおねるように云った、「あたしあんたが豊島の親類へいったって云いました、豊島の奥の親

類に不幸があつて、今夜は泊つて来る筈だつて云つたんですけれど」

「よく云つた、だがやつらは信じやあしない、信じやあしなかつたらう」

「だと思ふけれど、帰らなければもつとひどいことになるわ」

「威おどしたのか」

「帰らなければあんたがやった証拠だし、長屋じゅうの共謀だつて云うの」おたねは睡ののんだ、「長屋じゅうの者を訴えるつて云つてるのよ」

「よし、おらあ長屋へ帰る」

「まあ待て」と去定が遮つた、「しだいによつては相談に乗ろう、これはいつたいどういふことなんだ」

「どうかなんにも訊かないで下さい」と角三が云つた、「これ以上ご迷惑をかけたくはありませんから」

「迷惑か迷惑でないかはおれがきめる、とにかく話すだけ話してみろ」

「あんた」とおたねが云つた。

角三は横へ寝返ろうとしたが、「う」といつて顔ぜんたいを歪ゆがめ、苦痛をこらえるために下唇を嚙かんだ。そこへ、森半太夫が来て、入所患者の診察をする時刻だと告げた。

「よし」と去定は頷き、立ちながら登に云った、「おまえ話を聞いておいてくれ」

三

音羽五丁目の、藪下と呼ばれるその長屋は、三棟で二十四戸あり、二十一家族が住んでいた。家主は牛込神楽坂かくらざかの、高田屋松次郎という。先代は与七といつて、ずっと以前にはその音羽の五丁目で、小さな質屋を営んでいた。俗に「戸納質とだなじち」という、土蔵もないささやかな店だったが、しょうばいがうまく当って、安い売家や土地を買い溜めた。運もよかったのだろう、また、質屋の店をひろげずに、土地や家を買ひ溜めたことが、与七の性に合っていたのかもしれない。しだいに資産を積み、十五年ほどまえ、質屋をやめて神楽坂へ移り、地所と家作を専業にするようになった。

藪下の三棟の長屋は、与七がまだ五丁目で質屋をやっているじぶん、正確にいうと十九年まえから、店子たなごに無償で貸していた。店賃を取らないばかりでなく、直すところがあれば、高田屋で直し、店子には一文の負担もかけなかった。

「しかもそれは」と角三が云った、「与七という旦那の代だけではなく、伴せがれの松次郎の代

まで続ける約束で、差配の元助が証人だったそうです」

「なにかわけがあつたのか」

「あつたんでしよう」と角三は云つた、「なにかわけがなければ、そんな約束をする筈がありませんからね」

「理由はわからないのか」と登が訊いた。

「わからないんです」と角三が答えた、「差配も代が替りましたし、そのじぶんのことを知っているのは、このおたねのじいさま一人だけで、それもすっかりぼけちやつてるものですから」

だが約束のことはみんな知っていた。いまの差配は助三郎といつて、その界限かいわいにある高田屋の地所や家作の管理をしているが、死んだ父親の元助からちゃんと聞いていた。親から聞いただけでなく、与七の手で書いた店賃の帳面も残っている。元来、長屋といふところは住人の出替りが多く、五六年もすればたいい顔ぶれの変るものだが、店賃なしという珍らしい条件と、護国寺関係の仕事をする者が多かったからだろう、空家になつていゝ三軒のほかに、人の変つたのは七軒しかなかった。——当時からすでに二十年ちかくも経つので、老人といえば多助一人になつたし、その多助もぼけてしまつたが、高田屋との

約束は、みんなが知っていた。

「ところが、急にそれが変わったんです」

その年の五月、高田屋では与七が死に、一人息子の松次郎が跡を継いだ。彼は二十三歳であるが、去年の秋に嫁を取り、男の子が一人できていた。

「先月、いや十月の月ずえにその松次郎が来て、長屋をあけると云いだしました」角三は続けた、「ならず者みたような男を三人伴れて来て、この長屋は取とりこわ毀すことになったから、二十一軒ぜんぶ出ていけつて云うんです」

「約束を知らなかったのか」

「約束は知つてると云いました、けれども証文があるわけではないし、十九年も只で住んで来た、親の代のことはおれは知らないから、そんな反故ほごのような約束を守るわけにはいかねえつて、突っぱねました」

登は渋い顔をした、「それはむずかしい、むずかしい話だと思ふな」

「それは、あいつの云うことにも理屈はあるでしょう、けれども、松次郎があつしたちを追ひ立てるのは、金に困ったとかどうしたとかいうわけじゃあねえ、ちゃんとこんたんがあるんです」と角三が云った、「——つてえのは、藪下一帯の家を取払つて、そこへ新地

をつくり、料理茶屋とか岡場所を集めようというもので、護国寺の役僧も承知しているよ
うなんです」

ありそうなことだ、と登は思った。宗教と花街はふしぎに付いてまわる、浅草寺、根津
権現んげん、赤坂の氷川神社、芝の神明しんめい、ちよつと数えただけでも、これらの周辺には花街が
ある。護国寺は元禄年間の建こんりゆう立で、幕府から千三百石の寺領を付けられている。ひと
ころ、なにがしとかいう將軍家の未亡人が熱心に帰依したと伝えられるが、場所が寂しい
のと寺歴が新らしいのとで、それほど繁昌はしていなかった。しぜん寺僧たちの中で、近
くに新地などができたら、などと思う者もあるに相違ない。たしかにそれはありそうなこ
とだ、と登は思った。

「そうだとするとなおむずかしいな」と登が云った、「むろん新出先生に話してみるが、
十九年も只で住んで来たとすると、この辺でいつそ引越したほうがいいじゃないか」

「へえ、それはまあ、そうです」

「そんな面倒なことにかかわっているより、新しい土地へ移って、さっぱりと新規ま蒔き
直しにやるほうがいいと思うな」

「たぶんそのほうがいいんでしょう」と角三は力のぬけた声で云った、「しかしあの野郎、

あんまりあこぎなまねをしやがるから」

「あんた」とおたねが云った、「帰るんならもう帰らなければいけないわ、あたしがうちをあけてるんですもの、あんまりおそくなると謀しめし合わせたことを勘づかれてよ」

「ちよつと待て」と登は立ちあがった、「とにかく先生に話してみる、先生の意見を聞いてみるから、そのままちよつと待っていてくれ」

登は二人を置いてそこを出た。

去定の診察が終るまで、少し待たなければならなかった。登は食堂じきどうへ行って茶を啜り、それから去定の部屋へいった。去定は上衣を着替えながら、登の話の黙って聞いてい、次に机へ向かつて、その日の調剤を書き始めた。入所患者の一人一人に、病状と投薬を記した帳面があり、容態によつて薬を変える分は、そのたびに調剤の配合を書きつけるのであった。

「続けていい」と去定は書きながら云った、「それからどうした」

登は話し続けた。話が終つても、去定は黙つて筆を動かしていたが、やがて最後の帳面が済むと、筆を置きながら、深く大きくまるで唸うなるような溜息をついた。

「高田屋のほうはわかった」と云つて、去定は登を見た、「だが角三のほうの事情はどう

なのだ」

登は「それは」と云つて口をつぐんだ。

「相手を殺そうとまで思い詰めるのは尋常ではない、なにかそれだけの仔細しさいがあるのらう」

「それは聞きませんでした」

「肝心なのはそこではないか」と去定はふきげんに云つた、「——まあいい、向うへいつてからでもおそくはないだろう」

四

去定も角三を長屋へ帰すことにきめた。さもないと高田屋は、本当に長屋ぜんたいの者を、共謀といつて訴えるかもしれない。そんな訴えを、町方で取りあげるかどうかは疑わしいが、高田屋で金を撒まくことも考えられるし、いずれにせよ事が面倒になる。それよりも、角三は豊島郡の親類へいつて来たことにし、帰り道に崖がけから落ちていたところを去定がみつけた。それから養生所へ運んで手当をした、ということにしよう、と云つた。去定

はてきばきと手筈をきめ、よく口を合わせてから、おたねは先に歸し、戸板の支度をして角三を乗せると、少しおくれて養生所をでかけた。去定と登、それに薬籠やくろうを背負った竹造もいっしよで、伝通院の裏を大塚へぬけ、寺と武家の小屋敷の多い町を、音羽のほうへと向かつていった。——途中で角三が、戸板の蔽おほいの中から「忘れ物をした」と言い、去定がすぐに、あんな物は忘れてしまえと云った。登はなんのこともわからなかったが、暫しばらくして、ゆうべ持っていたあいくち匕首あいくちだなど気づいた。角三はそれつきりなにも云わなかった。音羽五丁目の裏通りへ来ると、路地へはいるところで角三が「その左の角です」と云った。長屋のその角の家は新らしく模様変えをしたらしい、裏通りに面して入口と連子窓れんじがあり、雨戸も戸袋もまだ新らしく、ちよつと見ると居酒屋のような作りであるが、その出入り口の雨戸には、幅五寸ばかりの板が斜十字に打ちつけてあった。

「どこからはいる」

「裏に勝手があります」と角三が答えた、「そつちから入れておくんなさい」
かれらは裏手へまわった。

戸板が担ぎこまれたので、たちまち人が集まって来た。去定は登を促して、勝手口をあけ、角三を移そうとした。すると、集まっている長屋の人たちを押しつけて、二人男が前

へ出て来た。——一人は三十がらみで、鳶とびの者といったふうに見えるが、他の一人はずつと若く、まだ二十三であろう、唐棧とうげん柄がらの素す袷あわせに三尺を低くしめ、素足に麻裏をはいていた。色が白く、眉が濃く、瘦やせがたですつきりした軀からだつきだが、一種の気分、——それはちように、賢い犬ならすぐに咆ほえかかるだろうと思われるような、きみの悪い気分が、軀からだぜんたいから発しているように思えた。

「それは角三ですね」と年とし嵩かさの男のほう云つた、「けがをしているようだが、ちよつとみせてもらいますよ」

「見てどうする」と去定が訊いた。

「ゆうべまちがいがありましたね」とその男は云つた、「この長屋の家主の旦那を、殺せうとしたやつがあつたんで、その下手人を捜しているところなんです」

「おまえはなんだ、町方の者か」

「いえ、私は高田屋さんの出入りで、伊蔵てえ者です」

「そういう下手人を捜すのは役人の仕事だろう」と去定が云つた、「それともその高田屋では、十手でも預かっているのか」

伊蔵は黙つた。

そのとき若いほうの男が、右手をふところへ入れながら、なにか云おうとし、去定がそれより早く、自分は養生所の新出去定という医者だ、と名のつた。どうやらその名を聞けば相手がぎよつとする、とても思つたらしい。少なくとも多少のおどろきは期待していたようだったが、若者の顔つきにはなんの変化もあらわれなかった。そこで去定の眼にほんの一瞬当てる外れたような色がみえ、登は可笑おかしくなったが、笑うわけにもいかなかった。もちろん去定はすばやく立ち直つた。

「よく聞け」と去定は云つた、「どこでどういうまちがいがあつたか、おれは知らぬ、だがこの男は昨日の夕方、豊島郡中丸村の鼠ねずみやま山で倒れていた、早道をするつもりで崖から落ち血まみれになっているところをおれがみつけた、それから養生所まで運んで手当をしたのだが、——そのまちがいというのは、いつ、どこで起こつたのだ」

「昨日の暮六つ、水戸さまの脇だ」と若者が云つた。女のようにやさしいが、その声もまたきみの悪いひびきを帯びていた、「おめえ、先刻ご承知じゃあねえか」と若者は笑つた。「知っているからこそ、先手を打つて、豊島だの鼠山だのつて、方角ちげえの場所を並べたんだらう、じいさん、そうだらう」

「伊蔵——とか云つたな」去定はそつちを見て云つた、「その高田屋の主人というのは殺

されたのか、それともけがで済んだのか」

「いえそれは、その、おりよく旦那のうしろに、出入りの者が三人ついていましたので」

「けがもせずに済んだのか」

「三人がすぐに駆けつけたものですから」

「乱暴者のほうはどうした」

「つまりその、刃物を持っていたんで、危ねえもんだから叩き伏せました」

「するとその男はけがをしたんだな」と去定はだめを押すように云った、「高田屋は無事で、乱暴者のほうがあべこべにけがをした、それでこの角三を怪しいというんだな」

若者が云った、「おい、じいさん」

「黙れ」と去定が叫んだ、高い声ではないが、その叫びはするどく、若者を睨にらんだ眼はぎらぎらと光った。

「きさまは黙れ」と去定はすぐに声をやわらげて、伊蔵に云った、「ここをよく聞け、伊蔵、——養生所は町奉行に属し、つねに与力が詰めている、この角三はおれが現に鼠山でみつけ、養生所へ伴れ帰った者だ、その事実は与力にも届けてある、だが仮にそうでないにしても、高田屋はなにごともしなかったのに、乱暴者のほうは三人がかりでやられてけが

をしたという、これが表沙汰になったらどう裁かれるか、よく考えてみる」

「しかしその、野郎は旦那を殺すつもりだったんで」

「証拠があるか」

「野郎がそう云ったって、旦那が」

「よせ」と去定が遮った、「誰がどう云い、誰がどう聞いた、そんな井戸端の喧嘩のようなことをお上かみで取りあげると思ふか、四人と一人、片方は大けがしている、殺すつもりだったというはつきりした証拠がなければ、お咎とがめを受けるのは高田屋のほうだぞ」

それから去定は若者に一瞥べっをくれた。

「ましてこんな、ならず者のような人間を使っていれば、たとえ正当な理由があつてもとおりはしない、帰つてよく相談をするがいい、おれはいつでも証人になるぞ」

若者は伊蔵を見た。右手をふところへ入れたままで、やるか、というふうな眼つきをしたが、伊蔵は首を振った。去定は登にめくばせをし、戸板の上から角三を抱きあげると、二人で勝手口から家の中へ運び入れた。そのまえに、おたねが人垣の中からとびだして来、先に家の中へはいつて夜具を敷いた。

「一つうかがつておきますが」と勝手口から伊蔵が云った、「その角三をよそへやるよう

なことはないでしょうね」

「この男は崖から落ちたとき足の骨を折っている」と去定が家の中で答えた、「二三十日は動けないから安心しろ」

五

伊蔵と若者が去ると、長屋の人たちがみまいに来た。火種を持って来た女房もい、おたねが茶の支度にかかった。去定は登をそこに残し、差配の家を訊いて立ちあがった。

「角三は眠らせなければいけない」と去定は出てゆきながら云った、「みまいが済んだらなるべく早く帰ってくれ」

去定にそう云われたのでみまいの人たちもまもなく帰っていった。

「威勢のいい先生ですね」と角三が枕の上で微笑した、「とてもお医者とは思えねえ、あつしはいまにべらんめえが出やあしねえかと思つてましたよ」

「やりかねないね」と登も苦笑した、「いざとなればやくざ者の三人や五人」

登はそこで口をつぐんだ。本郷みくみ町の出来事を話そうとし、危ないところで思いと

まったのであった。

「あんた」とおたねが脇から云った、「ついさつき刷毛屋はけやの源さんが追い出されたのよ」

「源さんが、どうしたって」

「吉三郎さんのときと同じよ」とおたねが云った、「へんな人足みたような男が三人来て、こんどおれたちがこのうちを借りたんだって、源さんたちを追い出し、家財道具ぼうも抛りだしてしまつたの、いまその三人はいすわって酒を飲んでるわ」

「源さんはどうした」

「相手が相手ですもの、どうしようがあるもんですか、おかみさんや子供たちと与平さんのうちにいますよ」

「どういうことだ」登が訊いた。

「高田屋のしごとです」角三は低く唸ってから云った、「掛合いじやあ塚つちがあかねえと思つたんでしよう、五日まえにも人足ふうの男を二人よこして、吉三郎というとしより夫婦を力づくで追い出したんです」

登は圧迫を感じながら訊いた、「ここには町名主まちなぬしか五人組はいないのか」

「そんなものが頼りになるなら、あつしだつてやけなまねはしやあしません」と角三は云

った、「あいつを殺してやろうと思うまでには、できるだけの手を打ってみたんです」

だが、条件は全部こつちに不利だった。この土地で護国寺の役僧がうしろ楯だてになっていれば、それだけでも理が非に勝たない。おまけに高田屋は金も遣うし、ここに「新地」ができるとすれば、五人組とか町名主などという連中も、餌えにとびつく狼おおかみのようなものだ。角三は長屋の者の総代四人といつしよに、でかけていつて援助を求めたが、かれらは手で相手にならなかった。

——二十年ちかくも只で住んでいて、まだそんな欲の深いことを云うのか。

むろん只でいようというのではない、「これからは相応な店賃を払う」という相談がきまつていたのだが、そんな話には耳も藉かさず、かれらはただ早く立退くほうがいい、と云うばかりであった。登は聞いていながら、どっちが正しいかわからなくなった。

——引越したらいいじゃないか。

どうせこれから店賃を払うつもりなら、こんなごたごたはさつぱり捨てて、よそへ移るほうが簡単ではないか。なんのためにそうねばっているのだ、意地いぢづくか、それとも住み馴れた家へのみれんか。登はそんなふうに、心の中で角三に問いかけた。

去定は半刻ほどして戻ったが、上へはあがらず、登と竹造を促して帰り支度をした。

「なにも心配はない」と去定はおたねに云った、「差配によく話しておいたから、伊蔵も乱暴なこととはしないだろう、明日また誰かよすが、短気なまねはしないように、——角三にも長屋の者にもそう云っておいてくれ」

音羽から外診に廻つたのだが、そのあいだ去定は、歩きながら登に仔細を語つた。歩いているあいだしは話ができないから、終りまで聞くのに暇どつたが、却つて詳しいことがよくわかつた。——角三とおたねは、来月の中旬に祝言をあげる筈であり、ここまでこぎつけるのに、まる四年かかつたということであつた。

角三は二十五になる。父は加吉といつて畳屋の職人だつたが、ついに自分の店を持つことはできなかつた。

角三は十二歳のとき、下谷の「灘紋なだもん」という、料理屋の板場へ奉公にはいり、板前の腕を身につけた。好きで選んだ職ではあつたが、天分がなかつたというのであろう、はたちになるまえ、「おれの腕は一流の料理屋には向かない」ということに自分で気がついた。それ以来、いつそめし屋をやろう、という気持になり、酒も遊びも断つて金を溜めた。——板場の職人といえど道楽者が多い、環境と仕事によるのだらうが、酒と女は殆んど付き物のようであつた。しかし角三は自分の腕の限度を知り、「めし屋をやる」という肚はらをき

めたので、なかまに軽蔑けいべつされながら、できる限りきりつめて金を溜めた。

このあいだに、角三はおたねと近づき、やがて夫婦約束をするようになった。彼女は早く両親に死なれ、祖父の多助に育てられた。多助は夜鷹そば屋をやっていて、まだ十二三のころからおたねは、仕込みも手伝ったし、夜は祖父といっしょに稼ぎにも出た。けれどもおとしの冬、祖父の多助は軽い卒中にかかってから、急に足腰が不自由になり、頭もぼけてしまつて、稼ぎに出られなくなつた。それでやむなく、おたねはかよいのできる茶屋奉公の口を捜し、二年このかた勤めて来た。

角三の父は、多助の倒れるまえに死んだ。母は五年まえに病死していたので、彼は一人だけになつたが、それをきっかけに住込みをやめ、藪下のうちから「灘紋」へかようことにした。こうして、二人は毎日いちどは会うようになり、「めし屋」をやることについて語りあつた。長いあいだ祖父の手伝いをしていたから、めし屋ならおたねも役に立つだろう。

——石にかじりついても、きつとものにしましうね。

おたねは繰り返し返しそう云つて、自分も乏しい家計の中から、僅かながら金を溜めるように努めて来た。すると今年の八月、いまの家が空いたので、差配に話したうえ、そのあと

へ移った。裏通りではあるが、護国寺の参詣道に近く、また周囲には武家屋敷も多い。武家の奉公人などは案外いい客になるから、きつとしようばいになると思った。同じ長屋に与平という大工と、小助という左官がいた。どちらも酒呑みで、手間取り程度の腕しかなかったが、その二人と相談をしておよその見積りをし、必要な材料を買って造作を直した。こういう仕事は、手間取り職人などのほうが融通のきくものらしい。むろん暇をみてやるので手っ取り早いわけにはいかず、九月末になってようやく出来あがった。角三とおたねは、このあいだに料理用のほうちよう庖丁類や鍋、釜、なべ食器などを買い集めてい、角三は九月いっばいで「灘紋」をやめた。——なおいろいろな準備はあつたが、十月十五日に店開きをし、ともかく二人でしようばいを始めた。正月のいそがしい時期が過ぎたら祝言をしよう、長屋の眼があるから、それまではお互いに身を固く、という約束もした。

「それから半月経って、高田屋から立退けと行って来たのだ」と去定は語った、「しようばいはうまくすべりだし、馴染の客も付き始めていたそうだ」

それだけではなく、角三は十余年かかって溜めた金（その中にはおたねの分も含まれていた）を、その店にすっかり注ぎ込んだうえ、酒屋その他の商人に借りもできていた。

六

いまそこを追い出されれば、角三は借金を背負ったうえすつ裸になってしまふし、おたねはまた茶屋奉公にでも出なければならぬ。それで長屋ぜんたいが相談をし、高田屋と交渉して来た。

「だが、保本も聞いたとおり、高田屋は承知をしない、護国寺が尻押しをしているかいかはともかく、町役連中も土地の繁昌えんせきという餌で、高田屋のみかたに付いていることは事実だ」と去定は続けた、「——ここで、長屋の者たちにもっとも不利なことは、二十ちかいあいだ、二十幾家族が無賃で住んで来たという点だ、公事くじに持つていくまでもなく、この点だけでも世間は高田屋の側に付くだろう」

「しかしいつたい」と登が反問した、「そんなに長いあいだ、どうして店賃なしなどという約束が交わされたのでしょうか」

「交わされたのではない、先代の高田屋与七のほうで、自発的にそう約束したのだ、おれは差配のところでは店賃の帳面を見たが、それには与七の名ではつきりと、松次郎一代まで無賃と書いてあり、与七と五人の長屋総代の署名、またそれぞれの拇印ぼいんが捺おしてあつた」

「字の書ける者がそんなにいたわけでしょうか」

去定は歩きながら、振向いて登を見た、「肝臓の悪い患者が、肝臓の悪いということを知らなくとも、肝臓の悪いことに変りはないだろう」

「はあ」と登はあいまいな声を出した。

「五人の総代が字を書けたかどうか、などということは問題ではない、店賃なし、という事実が証明しているじゃないか、——ばかなことを云う男だ」終りの言葉は独り言で、だが去定はすぐにまた本題に戻った、「おれの知りたいのは、どうしてそういう約束をしたか、ということだ、どんな理由があつて、与七はそんな約束をしたのか、それがわからない限り長屋の者に勝ちみはない」

暫く歩いてから、登が訊いた、「その理由を知っている者はいないのですか」

「角三が云つたとおりだ」去定は苛^{いら}だたしげに喉^{のど}を鳴らした、「総代五人のうち二人は移転し、二人死んだ、角三の親がその一人で、残っているのは多助だけだ」

「ぼけてしまったという——」

「おれはさつき訪ねてみた、卒中のためにぼけたのだろう、いろいろやってみたし、老人自身もけんめいに思ひだそうとした、しかし、おくめ殺し、ということしか記憶に残って

いないんだ」

登は去定の顔を見た。

「おくめ殺した、——おれの顔を見たつてなにもわかりやしなないぞ」去定は片手を意味もなく振った、「それがなにをさすのか誰にもわからない、長屋の者も手を尽して訊いたが、老人はその一と言しか覚えていないし、それがどんな意味を持つかもわからないのだ」

「ぜんぜん関係のないことかもしれないわけですね」と云つて慌てて、登は話をそらした、

「それでほぼわかりました」

「なにがほぼわかつたんだ」

「高田屋を殺そうとまで思い詰めた角三の気持です」そう答えながら、今日のおれはばからしいほど愚鈍だぞ、と登は思った、「——十幾年かの辛苦が水の泡あわとなり、まぢかに迫つた結婚もだめになった、しかも相手は金儲もうけが目的なんですからね、これでは嚇かつとなるのもむりはないと思います」

「そんなことに感心するやつがあるか、どんな理由にせよ人を殺すなどということはゆるされない、その点では角三は愚か者だ」と去定は怒りの声で云つた、「眼先の事ですぐによろこんだり、絶望して身を滅ぼしたりする例は貧しい人間に多い、恒産なければ恒心な

しといつて、根の浅い生活をしていると、思惑の外れた場合などすぐ極端から極端にはしつてしまい、結局、力のある者の腹を肥やすだけだ」

「約束の理由さえわかれば打つ手もあるにちがいない」と去定はまた云った、「坊主どもや強欲な連中に、いかがわしい新地などをつくらせるより、一軒のめし屋を守つてやるほうが本当だろう、だがそのためには、与七がなんのためにあんな約束をしたかという、その理由がわからなくてはだめだ」

暫く歩いてから、去定は空を見あげて、現実でないなにかに問いかけるように、熱のこもった声で呟いた、「いったい与七はなんの代償に、あんな約束をしたのだろう、——」

肝臓の悪い病人を診てそれがわからず、どこが悪いのかと、神仏に助けを求めている医者のようなあんばいですな、と登は心の中でやり返した。

その翌日、去定に命じられて登は角三をみまいにいった。おたねの手を借りて、傷を洗い、膏薬こうやくを替え、木綿を巻き直しなどしていると、一人の老人が杖つえを突きながら、勝手口へよたよたとはいつて来、おたねが吃驚びっくりして声をあげた。

「まあおじいさん、どうしたの」おたねは立つてそっちへいった、「独りで出て来たりして危ないじゃないの」

それが多助であろう、登は手を洗うために金盥かなだらひを引きよせながら、さりげなくそつちを見た。多助は孫娘に助けられながら、毀れた木偶こわでくのような、ぎくしゃくした動作で、勝手の上げ蓋のところへ腰を掛けた。(そのとき、持っていた杖が倒れて、かたんと高い音がした)老人は痩せていて、皮膚は蠟ろうのように白く、仮面のように無表情で、唇がだらんと垂れていた。

「わからないわ」とおたねがなにか訊き返していた、「なにがどうしたの」

角三がもの問いたげに登を見た。登は黙って首を振った。

「どうしたんだ」と角三が高い声で呼びかけた、「じいさんがどうかしたのか」

「ちよつと待つて」とおたねが答えた。

登は角三に、こんどは明後日来る、と云つて立ちあがった。熱もすっかりさがったし、傷の化膿かのうする心配もなさそうだ。明日いちど足のほうだけ膏藥を替えるがいい、そう云い残して外へ出たが、おたねと多助の脇を通るとき、多助が涙をこぼしながら、まわらない舌でなにか云おうと努めている姿を見た。唇から涎よだれをたらし、片手で喉を押えて、言葉にならない言葉を絞り出しているようすは、殆んどまともには見られないほど哀れであり、むしろすさまじいという印象を与えるものであった。

「いいわよ、うちへ帰りましょう」とおたねが云うのを、登はうしろに聞いた、「角さんは大丈夫よ、仏壇なんて縁起でもないことを云わないで、おじいさんはうちでじつとしてればいいの、なんにも心配することなんかありやあしないわよ」

登は路地から中通りへ出ていった。

七

登はそれから小石川橋へまわった。松平若狭家わかきで去定といっしょになる、という予定であつたが、音羽のほうが早く済んだためだろう、去定の来るまで、半刻ほど待たなければならなかつた。——そのあと、八力所の外診を済ませて、養生所へ帰つたのは午後五時。いつもに比べるとわりに早いほうで、登は久方ぶりにきれいな風呂へはいり、夕餉ゆうげも森半太夫と膳ぜんを並べて、ゆつくりと喰べた。食事が終つて茶になったとき、半太夫がなにげない口ぶりで、津川が戻つて来るよ、と云つた。登にはなんのことかわからなかつた。

「保本と入れ替つた男さ」と半太夫が云つた、「津川玄三げんぞう、覚えていないかね」
登は思ひだした。

「いやなやつだった」と登は云つて、訝いぶかしげに半太夫を見た、「——あの男が戻つて来るつて、……ここへか」

「ここへさ」

「彼は御目見医になつた筈じゃないか」

「ならなかつたらしいな」と半太夫が云つた、「いちどは席を与えられたが、へまをやつて番を外されたということだ」

「それでここへ戻るのか」

「そういうことだ」半太夫は茶を啜すつて云つた、「ここでも人が要いるらしいからな」

「ここで人が要るつて」

「ああ」と半太夫は話を変えた、「猪之とお杉が夫婦約束をしたそうだが、知っているかね」

登は首を振つた。半太夫はそのほうへ話をもつてゆき、登も興そそを唆そそられて聞いた、「ここでも人が要る」ということに、なにか意味がある、などとは思ひもよらなかつたのである。半太夫の話によると、狂女おゆみはもう余命いくばくもない、という状態らしい。正月までもつかもたないかという病状で、もしおゆみが死ぬとすれば、お杉は実家へ帰るこ

とになるし、実家には「帰りたくない」事情があるそうで、そのとき猪之と夫婦になり、二人で世帯を持つとうという相談がきまった、ということであった。

「この養生所でこんな面白い話を聞くのは初めてだ」と半太夫は云った、「おそらく養生所はじまって以来のことだろう、おれはそう気がついて心が重くなった、——この世に生きていて、この眼で、人が仕合せになるのを見るとということがいかに稀まれであるか、と思つてね」

そうだ、人が幸福にやっているのを見ることは極めて稀だ、と登は心の中で頷いた。猪之とお杉だつて将来のことはわからない、夫婦になれるよろこびは短い、生きてゆく年月は長いからな。そう思いながら、登は首を振つて笑つた。

「どうもこういうところにいると」登は云つた、「考えることがとしより臭くなつていけないな、いや、おれ自身のことだよ」

明るる日、登が去定の供をしてでかけるとき、門のところ、知らない男に呼びとめられた。いま門番に教えられたらしい、「保本先生ですか」と呼びながら近づいて来た。印半纏に股引、草履ばきで、年は二十六七。背丈は低いが遅たくましい軀つきで、口のまわりから両の頬まで濃い無精髭ぶしが伸びていた。

「あつしは音羽から来ました」と男はしゃがれた声で云った、「角三と同じ長屋にいる、大工の与平てえ野郎です」

刷毛屋の源治たちを引取った男だな、と登は思った。

「角三の容態でも変ったのか」

「いえ、そうじゃねえんで」と与平は頭を搔いた、なにか悪いことでもみつげられたように、頭を搔きながら云った、「じつはその、ちよいとした事ができたんで、今日の七つ

(午後四時)ごろにいちど来てもれえてえと、こういうわけで伺ったんですが」

「なにか騒ぎでもあつたのか」と去定が脇から訊いた、「また高田屋か」

「そうじゃねえ、いや、そうかな」与平はまた頭を搔き、首をひねった、「騒ぎじゃねえんだが、高田屋のことつてえわけでもねえんだが、騒ぎはあるかもしれねえが、そいつは来てもらえばわかるんで、いかがでしょう」

「七つだな」と去定が云った、「よし、その時刻までにいくと云っておけ」

与平は登を見た。登は「いくよ」と云って領いた。

外診の供を五力所済ましてから、去定に云われて、登は音羽へにかけていった。曇った午後で、四時まえだというのにあたりは暗く、弱い北風が肌へしみとおるほど寒かった。

角三の家の勝手口で声をかけると、おたねが出て来た。履物がごたごた並んでいるのを、登が不審そうに見たことに気づいたのだろう、長屋の人たちです、とおたねが云った。――あがつてみると、角三の寢床の横に、男たちが四人いて、登に挨拶をし、坐るところをあけた。男の一人は与平で、彼が他の三人をひき合わせた。左官の小助、魚屋の長次、車やりき力の正吉。小助は与平と同じ年ごろであり、長次と正吉は三十歳前後にみえた。

「いそがしいところを済みません」と寝たままで角三が云った、「じつは高田屋のことなんです、十九年まえにがあつたか、ということがわかつたんです」

「わかつた」と登は眼をほそめた。

「多助じいさんが来まして、ああ、ちようど貴方がいたときでしたね」と角三は云った、

「舌がもつれるうえにのぼせあがつていて、云うことがよくわからなかつた、貴方がお帰りになったあと、少しおちついてからよく聞いてみると、十九年まえの事で書いた物がある筈だつて云うんです」

初めはしきりに「仏壇」ということを繰り返していたが、やがて、高田屋との約束の件を書いた物がある、それには自分のほかに四人の総代の名と拇印が押ししてあり、亡くなつた加吉が預かつていた、と話しだした。

——おれは初耳だぜ。

角三は父からなにも聞いていなかった。そうかもしれない、と多助が云った。おまえは奉公ちゆうで、加吉さんの死に目に会えなかった。おまえさんが駆けつけて来るまえに、加吉さんがそのことをおれに話したんだ。

——そんなこともねえだろうが、もし長屋のことでいざこざが起こったら、仏壇の位牌いはいのうしろをみてくれ、そこにあのと書いた物があるから。

多助はそう聞いたが、そのまま忘れていた。そこへこんどの騒ぎで、「おくめ殺し」ということが頭にうかび、それがどんな事だったかを考えているうちに、昨日ようやく思いだした、ということであった。

八

「それが、あつたのか」と登が訊きいた。

「ありました」と云つて、角三は枕の下から平たく巻いた書き物を出して、「じいさんの云うとおり、位牌のうしろにこれが隠してありました」

「理由が書いてあるんだな」

「詳しく書いて、総代五人の拇印が押してあります、いや待って下さい」角三はその書き物を長次に渡ししながら云った、「これに書いてあることはあとで話します、いま云うとまづいことになるかもしれないんで、というのには、これからあつしたちのする事を、貴方はたぶんとめようとなさるだろうと思うんです」

登は角三の顔を見まもつた、「それならどうして、私をここへ呼んだんだ」

「証人になつてもらいたいんです」

「なんの証人だ」

「そいつはあとでわかりませう」と与平が云つた、「相手さえ来りやあすぐに始めるし、もうそろそろ来るじぶんなんだから」

「誰が来るんだ」

「高田屋でさあ」と云つて与平は角三を見た、「いけなかつたかい」

「松次郎を呼んだんです」と角三が登に云つた、「長屋を只で貸すという、約束の証拠がみつかった、それを見せるから来てくれといひましてね、来るといふ返辞でした」

「それで、どうして証人が必要なんだ」

「この人も諄くどいね」と左官の小助が云った。

「よけえなことを云うな」と角三が遮った、「おめえは自分の役目を心得てりやあいいんだ、長さんも大丈夫だろうな」

「提ちようちん灯とうを持ってゆくか」と長次が与平に振向いた、「今日は早く昏くれるらしいから、読むのにあかりが要ると思うんだが」

「おれがあとから持つていこう」と車力の正吉が云った、「呼んでくれればすぐに駆けつける、それでいいだろう」

登は黙った。かれらがなにをしようというのか、自分がどういふことの証人になるのか、まるで見当もつかないが、かれらは話す気はないらしいし、事はまもなく始まるようだから、黙つて見ているよりしかたがあるまいと思つた。——おたねが登に茶を淹いれて来、正吉が立ちあがった。おれはうちへ歸つて、提灯の支度をしておこう、みんなが通つたら原っぱの下までいつて隠れてるぜ、と正吉は云いおいて出ていった。

高田屋松次郎は四時ちよつと過ぎに来た。このあいだの伊蔵と、べつの若者が二人ついており、松次郎と伊蔵だけがあがった。角三が話しているあいだに、登は松次郎を横からよく眺めた。二十三歳だと聞いたが、三つ四つはふけてみえる。中肉中背で、どこにこれ

という特徴もなく、ただその眼つきや、ものの云いぶりなどに、あまやかされて育った人間の、権高な、こわいもの知らずといった感じが、露骨にあらわれていた。

「それは慥かなんだね」と松次郎が問い返した、「よもや作りごとじゃあないだろうね」

「ごらんになればわかります」と角三が答えた、「あつしたちみてえな頭のちよい人間に、高田屋さんほどのきれ者を騙せるわけがねえ、それほどの脳天気でもねえし、こちらに小石川養生所の保本先生がいらつしやる、先生が証人になって下さるんだから、ともかく証拠を見てもらおうじやありませんか」

松次郎は振向いて登を見た。

「保本登だ」と登は云った。

「高田屋の松次郎です」と云つて、松次郎は登の服装をじろじろ見た、「その着物は知っています、たしか養生所の先生がたの、お仕着でしたね」

お仕着という言葉に一種の調子があつた。明らかに軽侮の口ぶりであるが、登は微笑しただけであつた。

「長次と小助が御案内します」と角三が云つた、「保本先生もいって下さるそうですから、どうぞごらんになつて来て下さい」

「どこにあるんだ」

「崖下の空地です」と角三が云った、「但し、どうか供の人は残して、旦那お一人ですらして下さい」

「どうして供はいけないんだ」

「旦那の恥になるらしい」と角三は穏やかに云った、「亡くなった旦那もそれが心配で、誰にも知れねえようにしておきなすつた、それであつし達も今日までわからずにいたわけですから、どうかお一人でいっておくんなさい」

松次郎はちよつとためらい、伊蔵が「若旦那」と囁いたささや。それが却って、松次郎の自負心を刺戟しげきしたらしい、彼は伊蔵に首を振つてみせた。

「いいだろう」と松次郎はおうように頷いた、「私の恥になることかどうか見てみよう、やすだ先生もいらつしやるんでしようね」

登は黙つてい、角三が「保やすもと本先生だ」と訂正した。

「それは失礼」と松次郎は登に気取つた会釈をし、伊蔵に云った、「おまえは辰たつと銀を呼んで、ここで待つていておくれ、いいよ、一人で大丈夫、私も高田屋の松次郎だよ」

登は立つて、先に勝手口から出た。

「私も高田屋の松次郎、か」と登は路地へ出てから眩つぶやいた、「さぞ高田屋の松次郎だろうや」

すぐに与平が出て来、続いて松次郎、長次、小助と出て来た。長次は「こちらへ」と云つて、路地を奥のほうへと歩きだし、登と他の三人はそのあとからついていった。あたりはもう濃い黄たそがれ昏たそがれに包まれており、長屋のそこ此ここ処こに炊かしぎの火が見え、煙が巻いている中を、子供たちがやかましく騒ぎながら、どぶ板を鳴らして走りまわっていた。

長屋を出はざれると、一段高くなつて空地がある。その向うは崖で、崖の上には武家屋敷があるのだが、下からは見えなかつた。およそ五百坪くらいあるその空地は、人間の胸ほど高い枯草おほに掩おほわれてい、片方によつて二本、ひねこびた枝ぶりの松が、哀かなしげにしようぼり立っていた。長次はその松の木のほうへ近より、あたりを見まわしながら「この辺です」と松次郎に云つた。

「この辺つて」と松次郎が訊いた、「なにがこの辺なんだ」

「証拠のある場所です」と長次が云つた、「ちよつとこつちへ来てみて下さい」

松次郎は登を見た。登は片手で「どうぞ」というふうに一いち揖ゆうした。松次郎は明らかに不安そうで、そのために却つて虚勢を張り、長次のほうへ近づいていった。

「もう少ししろだな」と長次は松の木と崖とを見比べながら云った、「済みませんがもうちょっとしろへいつて下さい」

松次郎はうしろへさがった。

「もうちよつと」と云つて、長次は地面へしゃがみこんだ、「そう、もう少しですな」

松次郎はうしろへ二歩さがった。すると、彼の足がなにかを踏み外し、彼は両手を宙におよがせながら、すぽつと、枯草の中へその姿を消した。

九

濃い黄昏の光の中で起こったその出来事がなにを意味するか、あまりに突然で、登にはちよつとわからなかつた。両手を振りながら枯草の中へ姿を消してゆくとき、松次郎は大きな声で叫び、その声が地面の下へ、尾をひきながら落ちてゆくのを、あつけにとられたまま登は聞いた。

「あれがじいさんの云うおくめ殺しなんでさ」と与平が云った、「本当はそんな名めえなんぞありやあしねえ、ただの古井戸なんで、深さが二丈九尺、水のねえ空井戸なんだが、

昨日しらべましてね、毒氣のねえこともわかつたんだが、ずっと昔つてえだけで、いつのことかわからねえが、おくめつてえ女の子がおつこちて死んだことがある、古い人はそいつを知つていて、おくめの井戸と云つてたらしい、石の蓋をして柵さくを結つて、子供たちも決して近よらなかつたんだが」

「与平を黙らせろ」と長次が云つた、「おい正公、いるか」

正吉が提灯を持つてこつちへ来た。うまくいったか。うん、めどへびたりだ、と長次が云つた。それ、中で喚いてるぜ、ほんただ、野郎さぞ肝をつぶしたこつたらう。灯を見せしてくれ、と長次が云つた。登は黙つて、かれらのすることを眺めていた。

「あんたは証人だ」と長次が登に云つた、「こつちへ来て、これからあつしが野郎に云うことを聞いておくんなさい」

登は頷いた。空はまだ明るい、崖下になつてゐるその空地はすっかり昏くれてゐた。やや強くなつた風に揺られて、枯草がそよぎ、提灯の光が、五人の男たちの姿を、片明りに映しだしてゐた。長次はそろそろと井戸の側そばへ進みよつた。それは枯草に掩おほわれた穴というだけで、いま松次郎が落ちたところだけ、僅かに土の崩れた跡が見えるが、井戸だという形はなにも残つてゐなかつた。

「おい、高田屋」と長次がどなった、「どこかけがでもしたか」

底のほうで喚く声があったが、がんがんと空洞に反響するばかりで、言葉はまったく聞きとれなかった。

「それだけ元気な声が出せるんなら大丈夫だろう、よく聞け」と長次が云って、ふところからさっきの書き物を取り出した、「これからわけを話してやるからな、おい、よく聞くんだぞ高田屋」

「耳の穴をかつぽじれってんだ」与平が云った。

「おめえは新しいことを云うよ」と小助がやじった。

「黙つてろ」と長次は制止し、井戸の中へ向かつて、書き物を読みながら云った、「いいか、よく聞いてろよ、高田屋、——これはな、昔ここにあった武家屋敷の空井戸なんだ」
長次はそこで、与平が登に話したことを、もつと詳しく語ったが、女の子の年は六つ、井戸を塞いだのは木の蓋であった。

「いまから十九年まえの十月、日にちは十五日、おめえは四つの年だったが、この井戸へ落ちたんだ、いいか」と長次は続けた、「おめえは一粒種で、親御さんにとっては何んにも替えがたい大事な子だった、近所合壁がっぺきの騒ぎになり、人を雇ってまで捜した、むろん

この井戸へも見に来たろうが、どうしてもわからねえ、神隠しか人さらいか、占ってもらつたり加持かじきとう祈禱もやった、それでも行方がわからねえ、おめえのおふくろさんは気おちがして病気みたようになるし、おやしさんもすっかり諦めあきらちまった、人にさらわれて遠国へいったか、死んじまったもんだと諦めた、ところが四日めに、この長屋の者がおめえをみつけたんだ、それでもねえ念のためだといって、綱を着けて中へおりてみた、するとおめえはその井戸の底、——いまおめえのいるそこに倒れていた、助け出して医者に診せたが、医者はだめかもしれねえと云つたそうだ」

井戸の中はひっそりとして、なんの音も聞えず、長次の声の反響するのが、あたりの静かさを際立てるようであつた。

「だがおめえは助かつた」と長次は続けていた、「親御さんがどんなによるこんだかわかるだろう、この恩は子孫こまごの代まで忘れないと云つて、長屋三棟、二十四戸の店賃を、おめえの代まで只にする、という約定ができたんだ、但し、旦那はこのことをないしよにしてくれと云つた、おめえは四歳で、少し経てば忘れるだろう、こないやな事があつたということは、二度とおめえに知らせたくない、決して店賃の代りというわけではないが、どうかこの約束だけは守ってくれ。——親の慈悲だぜ、そう思わねえか高田屋、——長屋の

者は約束を守った、そのために今日までどうして無賃で貸されたのかわからなかったんだ」
 長次はそこで、角三の家の仏壇から、総代連署の書き物が出たことを語った。

「これでわかつたらう」と長次は云った、「おめえは先代の約定を反故ほごにしようという、おれたちがこれからは店賃を払う、と云ったがきかなかつた、それならこつちもこつちだ、おめえは十九年まえそこで死にかかつていた、現におめえのいるその場所だ、そこが、見せると云つた証拠の場所なんだ、わかつたか」

井戸の底から喚き声が聞えて来た。反響がひどいうえに、恐怖のため声がうわずつていたので、言葉はやはり聞きとれなかつた。

「おい、そうどなるな」と長次が云つた、「どなつたりあばれたりすると、それだけ早く精が尽きちまうぜ、それにここは忘れられた場所だ、おれたちでさえ、書いた物が出るまえには知らなかつた、いくら喚こうと叫ぼうと、こんりんざい人の来る氣遣きつけえはねえ、へたにあばれるより、おちついてよく考げえてみるんだ、四つするときそこで、死にかかつていたつてえことをな、——あばよ」

長次が手を振ると、与平たち三人が、向うから石の蓋を運んで来、三人がかりで、やつと井戸の口を塞いだ。

「先生に話さなかつたわけがわかるでしょう」と長次が登に云つた、「こうするんだと聞けば、先生はきつと反対なすつたでしょうからね」

「どうだかな」と登は微笑した。

「あつしたちのような人間でも、このくらいのはらいせはしたかつた、これで野郎も幾らかこたえるでしょう」と長次が云つた、「さて、角三も待ちかねてるだろうし、帰つてこの書き物を読んでもらいましょうかね」

「しかし、まさかあのまま」と登が訊いた、「高田屋をあのままにして置くつもりじゃないだろうな」

「まあね」と長次があいまいに云つた。

五人は長屋へ戻つた。伊蔵には「旦那はもう牛込へ歸つた」と告げ、角三の家へあがつて始終を話した。登は書き物を読み、そこに長次の云つたとおりのことが、詳しく書いてあるのを慥かめた。

「私は口出しをしないが」と登が云つた、「とにかく証人になつたんだから、高田屋にもしものことがあると」

「ええ、わかつています」と角三が遮つた、「先生に迷惑のかかるようなことは致しませ

ん、いずれ事が決着したらお知らせにあげますから、どうか心配しないでいておくんな
「さう」

登はまもなく別れを告げた。

それから一日おきに角三の手当をしにかよったが、角三はなにも云わなかった。そうして五日めになったとき、初めて「事がうまくおさまった」ということを角三が話した。

「ゆうべ井戸から揚げたんですよ」とおたねが云った、「あたしたちみんな、これまでどおりここにいられるんですって」

「仕返しの心配はないのか」

「芯しんからこたえたようです」と角三が云った、「あの書き物へ自分から進んで、名まえを書き爪印を捺しました、まったく、芯しんそここたえたようすでしたよ」

「あの井戸の底ではな」

「あつし共は店賃を払うつもりです、い、いてえ」膏こうやく薬を剥はがするのが痛かったらしく、角三は顔をしかめて唸うなった、

「——お手やわらかに頼みますよ先生」

青空文庫情報

底本：「山本周五郎全集第十一巻 赤ひげ診療譚・五瓣の椿」新潮社

1981（昭和56）年10月25日発行

初出：「オール読物」

1958（昭和33）年11月

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：北川松生

2018年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

赤ひげ診療譚

おくめ殺し

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 山本周五郎

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>